

地歴公民(世界史) 慶應義塾大学 商学部 1/2

<全体分析>

試験時間 60分

解答形式

マーク式・記述式・論述式

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易(易化・**やや易化**・変化なし・やや難化・難化)

大問数は従来と同じ3題。マーク式の空欄補充語群選択問題の総数は昨年度の57問から今年度は65問に増加したが、記述・論述式の総数は2問減少したため、全体の分量として大きな変化はなかった。難易度は、細かい用語の出題が減少したことから、全体的にやや易化した。

出題の特徴や昨年との変更点

マーク式の空欄補充問題を中心に、下線部対応の記述式と論述式の問題が出題される近年の形式が維持された。史料問題や地図問題は出題されていないが、アフリカにおける国家の位置など昨年度同様に地理的な知識を要求する問題が出題されている。

その他トピックス

昨年度は年号や年代をはじめ数字を問う問題が6問出題されたが、今年度も年号問題が6問出題された。例年、現代世界の諸問題にかかわるテーマを扱うのが商学部の特色であり、第二次世界大戦後の現代史からの出題も近年増加傾向にあったが、昨年度は時事問題や戦後史の問題が出題されず、今年度も20世紀後半からの出題は1問のみであった。なお、直前講習の「早慶大世界史テスト」では、カルティニやインドネシア共産党を出題していたため、受講生は容易に解答できたであろう。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	マーク式 記述式 論述式	西洋世界を形作った 文明の起源	問1空欄(1)(2)のホモ=エレクトゥス、また(3)(4)と(5)(6)における旧人や新人の出現時期といった化石人類に関する知識は、例年受験生が苦手意識をもつ分野なので得点差が開くところとなったと思われる。(9)(10)のイラクや(35)(36)のレバノンなど、歴史的事項が現在のどの地域にあたるのか、地理的な知識が問われた。	標準
II	マーク式 記述式	ゲルマン人の大移動 およびスラヴ人の動 向	(59)(60)ではカールの戴冠がローマのサン=ピエトロ大聖堂でおこなわれたことはやや判断に迷ったかもしれない。(83)(84)でも「南部に展開した最大勢力」などからセルビア人であることを想起したい。問6ではグラゴール文字なのかキリル文字なのか迷った受験生もいたであろうが、「10世紀からスラヴ圏東部に普及」とあるのでキリル文字であると判断したい。	標準
III	マーク式 記述式 論述式	帝国主義列強のアジ ア・アフリカ侵略	(103)(104)では大陸「東部」からエチオピアを、(105)(106)では「西部」からリベリアを導き出す。(107)(108)でのフィリピン革命が1896年に始まったことは細かい。なお、文章中の「フィリピン」はフィリピンを指すと思われる。(117)(118)に補充する「中国の都市」には広州の言い換えとして広東を選びたいが、ベトナム光復会の結成地としては細かい。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

地歴公民(世界史) 慶應義塾大学 商学部 2/2

<学習対策>

慶應義塾大学の商学部は、学部の性格にあわせた社会経済史のテーマ問題が出題される。特に、16世紀以降の世界の一体化に関する問題は頻出である。また、20～40字程度の論述問題なども出題される。このような問題に対しては、世界史用語の暗記だけではなく、前後関係や因果関係をしっかりと理解しておく必要がある。また、今年度は出題されなかったが、現代社会の諸問題からの視点の問題も多いので、普段から、現在世界で起こっていることと、世界史の学習内容の関係について、考える習慣も身につけておきたい。